綜　　説

混住社会への動き

富山県農村医学研究会
会長　豊田文一

先日、宇都宮市において開催された第10回日本僻地保健医療研究会に出席し、私は「諸外国における僻地医療事情について」講演し、その冒頭に「わが国では、僻地医療事情は可なり改善している」と述べたところ、会場より「未だ僻地の医療事情は改善されたとはいえない」と鋭い討論の矢が放たれた。このことは僻地医療とは、何かという根本問題に触れることである。

南北に走る日本列島は約3,000キロ、その間の一つの地点にたっての考察は改善されていないというのも妥当かも知れない。しかし北陸地方全般についていえば、僻地医療事情は改善されているといってよい。約10数年前、能登半島の先端のある部落へ検診に行ったことがある。輪島から西へ途中まで車が使えたが、一つの峠がある。ここには車を通ずる道路がない。医療器具を背にして峠を越した記憶は今でも残っている。しかし今は道路が開通し、輪島まで30分以内の距離になっている。成程今でも無医村である。僻地医療は、もちろんその住民の健康保持が主たる意義を有するが、健康破綻に陥れば早急に処置しうることである。この研究会で私の述べた真意は、交通網の改善によって僻地医療事情も改善されたということである。大局的にみてわが国、北陸地方も同様であるが、私の知る限りでは、道路網が整備され、時間的制約は、取り除かれつつある方向を辿っていることは否定できない。

さて観点を変えて按ずると、僻地解消とともに、かつての農村は、その姿を失われつつある。このことについて本誌第8号に「都市近郊農村の社会医学的研究　序論」として私見を吐露したわけであるが、とくに政府は「田園都市構想」を打ち出している。かつての農村は、混住社会となり、ここに新たな問題、地域保健医療についての問題が提起されることは必至であり、私どもの推進している農民の健康管理にも、新しい様相の起こりうることも想像される。かつて私が見聞した広大な地域に散在する僻地を有するシベリア地区も、ソ連政府は、これを人口1万単位の集落を形成し、公営住宅、市場、学校、役場、郵便局、公園、病院、保育所など行政、文化、厚生施設などの集中を計りつつある。この事例にみられるようなことは、わが国の田園都市構想のなかにも見られ、逐次この方向に進むのでなかろうか。

食料生産基地として農村がある限り、農村環境は消えるものではない。ただ農村以外から混住してきた人々は、都会地において経験しなかった農薬汚染、畜産による悪臭、農業機械による騒音など、農村全般として取り扱う場合、これらの人々もともに考えねばならない。同時に農村自体、人口、世帯の急増、工場の進出など、協同体としての農村、さらに人間関係はどのように変化してゆくか、それは単に身体的健康はさることながら、精神的、社会的健康がどのように推移してゆくか。私どもは農民の健康管理を推進しつつこの問題も等閑に付してはならないと思う。

現在、好むと好まざるに拘らず、農村は混住社会へ動いている。また先に述べたように政府の施策として田園都市構想もこれに拍車をかけるかも知れない。このため私どもの研究会もこの問題を取り上げ、一つの命題として研究を進める必要がないだろうか.

以上、感慨の一端を述べ、本誌第8号の「都市近郊農村の社会医学的研究　序論」の続編とする。